

心奥探訪

季節巡り 透明な色

2025年2月

まだまだあどけない少女が母親の横から顔を覗かせる。

画面越しに交わす挨拶。

「よろしく願います。」

目の前に座った少女は落ち着いた雰囲気です。質問に答え始めた。

―株式会社の設立―若干小学6年生の少女が語る未来の姿。

設立までの約3ヶ月、

少女は何を感じ、何に想いを馳せたのか。

どんな想いで、その日を迎えるのか。

そこには、ただありのままに輝きを放つ

透き通る世界が広がっていた。

夢を語る彼女にとって大きな転機となったのは、

昨年の秋に行われたプレゼンテーション大会。

そこで彼女は12名のファイナリストに選ばれ、優秀賞となった。

「話すのが得意じゃない」そんな彼女が大きな挑戦を経て、

見たもの、聞いたもの、感じたものは大きな経験となって

世界を広げたのかもしれない。

「本気でやるつもりできたけど、本当に出来るとは思ってなかった」

社長になると決めてから約3ヶ月、

設立まで2ヶ月となったある日の彼女の言葉。

彼女の夢物語が現実味を帯びてきていた。

ロゴや名刺、必要なものを準備しながら、

大人に混じり交流会にも顔を出したという。

一步一步、設立に向けて動いていた彼女だが、

時期はちょうど小学5年生から6年生へと移り変わる時期でもある。

5年生のまま6年生に上がりたいと言うほど大好きだったクラスメイト。残された5年生の時間を存分に楽しみながら、

家では設立に向けての準備に追われ、時には朝方までかかったものもあったという。

やると決めたらやる、そんな彼女の性格もあつたのかもしれないが、会社を通して広がる世界が、彼女を前に進ませていたのかもしれない。

「幸せが広がればいいな」

社長という想いを決める前から抱いていた世界。

その世界を強く願い始めたきっかけが、5年生の仲間たちだったという。

元々、お菓子や小物などを作ることが大好きだった彼女。

自分の好きなものを作り、誰かにプレゼントとして贈る。

似た友達に恵まれ、誰かにあげる喜び、受け取った嬉しさをより強めた彼女はさらに大きく広げる後押しになったという。

設立までの間にも、主催でのイベントを行ったり、

歌のレコーディングを試みたり、

やりたいと思ったことには一直線に突き進む彼女。

3月には高校1年生になる兄も加わり、

いつ尋ねても楽しい、嬉しい、ワクワクし続けていると

目まぐるしく過ぎゆく日々を過ごしていた。

そして、「3月は満点」そう笑顔で答える彼女が4月を迎え、6年生に上がる。

班長やリーダーというポジションに立候補したという彼女だが、

彼女自身も昔はやりたくなかったというほどに人前に立つことは苦手だったという。

それが今では自ら立候補し「話すことは得意になった」というほど、

この1年間で彼女を大きく成長させていた。

やがて迎える設立予定日。

彼女のパートナーであるハムスターの誕生日と日付を合わせたという。

動物が大好きな彼女らしい決め方でもあり、

そこには動物たちに対する愛が詰まっている。

何よりも彼女の作る会社の社名――

元々の社名にはプレゼン大会の直前にこの世を去ったウーパールーパーの名前が入っていたという。

最終的には周りと相談して違う社名に決めたというが、その意志は受け継がれている。

そんな想いを込めた必要書類を提出し、母と兄の三人で食事を終えた時、提出し忘れていた書類があることに気づいたという。

厳密には提出する課を間違えていたということだが、

「まあいつかって」

彼女はなに一つ気にすることなく笑って話す。

その日に自分の足で行き、自分の手で提出したという事実こそが彼女にとっては大事なのだろう。

結果として予定より3週間遅れの4月の末日が記録としての設立日とされたという。

しかし、ずれたからこそ亡くなったウーパールーパーと

瓜二つの一匹との出会いがあり、

彼女にとっては最高の状態で設立を迎えたと言えるのかもしれない。

彼女の失敗を失敗と捉えない純粹さ。

そんなミスもご愛嬌とでもいうように、彼女自身はいつでも等身大だ。

食べることが好きなのに好き嫌いも多く、

睡眠は友達^{とも}というほど寝ることが大好きで、

気が乗らないことはやらずに、やりたいことに目を輝かせながら、おどけて楽しむ。完璧でもなく、特別なわけでもなく、ただただ真っ直ぐに。

だからこそ彼女の描く夢は透き通った透明色なのかもしれない。

設立を終え彼女は語る。

「動物たちと色々やっていきたいです」

動物たちを家族で盛り上げたい、そして家族も盛り上げて、

周りも盛り上げていきたい―と。

身近な愛の伝播、彼女が描く優しい世界は小さなところから始まっていく。

彼女と会社が目指す一つの到達点に、

『子ども社長を1000人作る』を掲げているという。

子どもだからできることがある。

やりたいことや好きなことを本気で取り組む1000人の仲間たち。

まだ見ぬ仲間に想いを馳せて、彼女は言う。

「みんな笑ってほしいです」

家族、仲間、動物たち。

彼女の大好きな人たちに願うたった一言が、全てを物語る。

この先、どんなことが待っているのか
きつと多くの出来事に彼女は出逢うだろう

時に喜び

時に涙しながら

あどけない少女は少しずつ大人に近づいていく

けれど、どんな出来事を前にしながらも

等身大の輝きで真っ直ぐ突き進むに違いない

透き通った想いが今、ここから始まっていく

